紅蓮の魔術師

清水　ミレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ３７２５Ｕ

【作者名】
清水　ミレイ

【あらすじ】
主人公のシュレンは１５歳。成人して師の下で働きつつ、自立して議会に出る事もある。幼馴染のウォルと師に背中を預け、戦乱の渦へ飛び込んでいく・・・

1　日記

シュレン。それが私に授けられた名。リザルト魔術国が、私の記憶の原点。私の戦場の名（ラハ・ウォーム）ー紅蓮の魔術師（紅蓮の悪魔）ー。それは、リザルト魔術国がシュバン連合軍と戦争を行ったとき、私が使った紅蓮の術からと、私の瞳孔の色からきた。私はその魔術でシュバンの野営地を奇襲し、全滅させた。

ウォルは、私の幼馴染、というか、互いに一定より前の記憶がないというだけだけれど、互いの記憶の原点のときに出会ったから、幼馴染で正しいのかな。ウォルの戦場の名はー暗黒の剣士（ダーク・キラー）ー。夜に駆け、彼もまた魔術とともに剣を扱い、連合軍の１０％は彼の手で闇へ帰った。

リョクが私の師。氷山の洞窟で凍傷になっていた私を見つけて弟子の一人にしてくれた。戦場の名はー白の剣（ホワイト・ソード）ー。戦場で先生の剣が魔術で白に輝いたのと、先生の髪の色かららしい。先生は３０％を闇へ帰した。

ルーザンがウォルの師。ウォルは灼熱の砂漠で脱水症状を起こして死に掛けていたらしい。今はいらないほど元気だけど。戦場の名はー銀の蛇（シルバー・スネーク）ー。ルーザン様の瞳と、剣の模様かららしいけど、実際はよくわかっていないらしい。

私は今、１５歳でもう成人している。ウォルの方が1歳年上なのが許せないけど、ウォルよりも役職は上・・・だと思う。ウォルは成人して1年たっているのに、嫁を探す気配が全くない。魔術師の女は成人して嫁がなくてもいいけど、男は夫婦になるのが普通だ。何でなんだろう・・・？

璃暦７５２年　星の月２３日

2　記憶の原点

あの時のことは、よく覚えている。

寒い、寒い。体のいたるところが痛い。そうだったはずなのに、突然暖かくて柔らかい毛布をかけられたかのように暖かくなった。目を開けた。眼前に、緑色の知的な目に、白い髪の２０代前半の男の人がいた。

「目が覚めたのですね。あ、まだ動いてはいけませんよ。凍傷があるし、骨折しているところもあるじゃないですか」

私は私の肌に触れるか触れないかのところにある男の人の手を見た。うっすらとした赤い光を放っている。痛いところが痛くなくなって、寒いところは寒くなくなった。

「もうおきても大丈夫ですよ」

私は手をついて起き上がろうとしたが、筋肉に力が入らなくて起き上がれなかった。すると、男の人はそれに気付いて背中に手をあててくれた。

「有難うございます」

私は礼儀に習って正座をし、額を地面につける正式な礼をした。男の人は少し困ったように言った。

「そんな風に頭を下げないでください。君はまだ子供なんですから少しくらい大人に甘えても構わないんですよ？」

「・・わかりました」

そういって私は顔をあげた。男の人は不思議そうに私を見ている。

「どこからこんなところへ来たのです？」

「・・・」

私は黙るしかなかった。全部を思い出そうとしても、思い出せるのは恐怖と悲しみ。それで私は涙を流してしまった。男の人はそんな私を優しく抱きしめてくれた。

「泣けるだけ泣くといいですよ。涙は悲しみ。それがかれるとき、悲しいことを忘れる事ができる」

「貴方は、・・私に・全てを忘れてしまえと・・おっしゃるのですか」

男の人は私をはなして少し驚くような表情をした。

「そういうわけではありませんよ。辛い事、悲しいことを忘れてしまったほうが良いと」

「そんなこと、どれほど望んでも・・私は・叶わないでしょう。・・何も覚えていないのですから・・。それでも、恐怖と・悲しみだけは・・・染み付いているのです」

そうですか、と男の人は言った。

「君の名は？」

私は黙って首を横に振った。

「何も、覚えていないのです。家族の有無も。故郷の景色も」

そう、と男の人は言った。

「ならば、私の弟子の一人になりませんか？」

「弟子？何のです？」

「魔術です。私は魔術師なのです。そういえば、自己紹介がまだでしたね。ここはリザルト魔術国のアルトロ山。私は数ある魔術師の一人、リョクと言います」

リョク、さん？と私が言うと、リョクはフフッと笑った。

「君は今日から私の弟子なのですよ？」

「あっ」

私は体を小さくした。弟子なんだから、師匠は先生、と呼ぶことになる。

「先生、私はこれからどうすれば？」

「そうですね、私の家の一室で寝泊りして、君は一番下の弟子となるので主に掃除ですかね」

「掃除、ですか？魔術を学ぶことは不可能では？」

「それは後で説明しますよ。君の名でも決めてしまいましょうか。そうだな・・・」

と言って先生は私を頭から足の先まで観察するように見た。

「うん、決めた。シュレン、なんてどう？ちょっと男っぽいですが、その珍しい瞳孔の色にあっていると思いますよ」

「そう、ですね」

私は一瞬戸惑ったが、名前なんかをどうこう言うつもりはない。

「シュレン、ついてきてください、とは言えませんね。まだ応急処置くらいしかできていませんから。」

と言うと先生は私を抱き上げた。

「この方がいいですよね」

そう言ってどう行ったのかわからないけど、すぐに先生の家についたのは覚えている。もし、先生が私を助けなければ、この国はもっと平和だったのかもしれない。

3　今の過去

うーん、と伸びをして部屋を出る。シュレンに割り振られた部屋も他の部屋と同じく簡素で机、椅子、本棚、ベッドのみしか置かれていない。食事は食堂っぽいところで下から二番目の弟子が作る・・・はずだった。今のそれはあまりに料理が下手だった。誰も代わろうとしなかったので、今は一番弟子のシュレンの仕事になっている。

先生(リヨク)の今日の大雑把な予定は・・１０：００～高位魔術師議会。１５：００～中央魔術師育成院で授業・・・はしごするのか・・。で、しばらく時間が空いて１９：００～・・・・・・。あの野郎。何でだ。嫌がらせか？シュレンは頭をかかた。何故舞踏会が入ってるんだよ！？一番弟子が師について色んなことやるって決まってるのに。で、舞踏会はキャンセルしてくれって土下座してたのんだのに！？（流石に屈辱だった）

チッと小さくしたうちをしながら厨房へ入り、昨日作ったパンのたねをオーブンで焼く。時間が少ないので目玉焼きと簡単なサラダを作る。クソッ！何でこんなに弟子がいるんだ！？オーブンで焼けたパンを手で半分に割ってレタスとトマト、カリッと焼けたベーコンをはさむ。よし、これで昼食はどうにかなるだろう。

準備を一通りして先生の部屋に行く。

「先生、準備整いました」

・・・。この野郎。どんだけ本の虫なんだよ・・・。

「先生、時間ですけど」

・・・研究ばっかりだ。ちょっとは違う本読めばいいのに。

「先生、本燃やしますよ？」

「それはやめてくださいっ」

いつもどおりに軽く脅すと起きる。何なんだこの先生は？これがなかなか強い魔術師なんだから、この国は既に腐っているはずだ。面はなかなかいいらしいけど、早く嫁探せばいいのに。

「先生、朝食と馬車を用意しました。それから議会の資料はいつものカバンに入れています。９時には馬車に乗れるよう、お急ぎください」

「シュレンは酷いですね。いつも私の本をそうやって・・・」

「先生、嫌なら夫婦の相手をお探しください。毎朝起こさず食事の用意もなければ私の自由も増えますから」

忙しいんですよ、と先生は言って部屋を出て行った。・・・正直、お嫁さんは辛いだろうなぁ・・・。

「あーもう！だから夜更かしは体に良くありませんと言ったんですよ」

私は馬車の中で先生にそう言っていた。１０分オーバー。正直議会に遅れるのは面倒だ。

「ですから魔術で時空を「わかっています。ですがどのようなことが発生しても対応できるように私が今それを行っているところです」

すみませんねぇ」

ハァ、と私はため息をついた。空間を簡単に切ってはりつける。しかし、人のいる空間は切らないように気を使った。人が万が一元に戻す前に空間の外へ出てしまったら、元通りにできない。

馬車が止まった。私は先生をせかしながら先生にカバンを渡した。

「先生、あと10分で議会が始まります」

「おーい、リョクじゃねえか」

先生は馬車を降りると声の主に声をかけた。

「ルーザン、遅刻ですか」

「お前もだろう」

熊のように力強い体格のルーザンはシュレンを見てニッと笑った。

「お前の一番弟子は秀才と有名だ。師匠と違って落ち着きがあるしな。よう、シュレン。こんな奴といて骨が折れるだろ？」

「おはようございます。確かに疲れることもありますが、それは皆同じですから」

「聞いたかリョク？お前さんの弟子は大人びてるな！シュレンはまだ入らないのか？」

「はい。成人していませんし、何時間も室内にいるのは苦手なので」

そうか、と言うとルーザンは先生に声をかけた。

「それじゃあ急ぐぞ。ギリギリセーフにも届かなくなる」

「ああ。シュレン、馬車で待っていてください。大体・・・「2時間で終る予定、ですよね」・ですから」

「わかりました」

私は頭を下げた。何であの人が強いんだ!?

4　どスケベ野郎

先生を見送ると特にすることがなくなった。微笑みながら深呼吸をする。これくらいの自由さが、シュレンには嬉しかった。

「シュレーン！」

シュレンは一瞬顔をしかめた。誰かということが一瞬にしてわかった。・・・嫌な腐れ縁だ。

「何の用、どスケベ野郎のウォル？私は貴方を嫌っているということくらい分かるでしょう？」

「何だよ、まだ引きずってんのか？」

まだ引きずっているアレは本当に最低だ。やられた瞬間に殺してしまおうかと思った。

「何だよ、俺だって好きでああなったわけじゃねえのに」

「でも謝ったらどうなの？女の子っていうのはファーストキスの相手が誰かっていうのをそれはそれは楽しみにしているものだけれど？」

事故だった。多分。いや１００％事故だった。冬に水が氷になっていてスケート気分ではしゃいでいたウォルが私に直撃。・・・まぁ、会話でその後は想像していただきたい。

「だからホントごめんって！」

シュレンはウォルを睨みつけた。少しのっぽなウォルを見ていてふと思った。

「ねえ、何であんたお嫁さん探さないの？」

ウォルの顔が一瞬赤くなる。

「う・・うるっせぇな！文句あんのか？」

「だってあんた成人したじゃない」

「まだ成人してないお子様にはわかんねぇよ」

わるかったですね、と言いながらシュレンは雲の流れがありえないほど早いことに気付いた。ウォル、と呼びかける。

「シュバンってどれくらいまで近づいているんだった？」

リョクも、ルーザンもその問題で呼ばれたのだった。

「大体4200リだ。（1リ＝約100ｍ）」

そんな近くに、とシュレンは呟いた。今、戦っている。誰かが雲を寄せ集めている。

「シュバンは大体500～70000の軍が複数あった・・・短ければ3ヶ月でここまで来てしまう・・・」

ウォルが驚いたような顔をしてシュレンの顔を凝視する。

　こいつは、こいつには何があったんだろう。ウォルは心の中で呟いた。

はじめてあった時、シュレンもウォルも互いに似た何かを見つけた。おかしい色をした瞳孔を。

シュレンは紅、ウォルは赤紫の瞳孔だった。それでも、互いに近づける気はしなかった。見つかった環境が違う。目に見えない何かが明らかに違う・・・。

互いに、互いを深く知る事は許されないことなのかもしれない・・・・・・・・。

5　決められた運命

2時間後、リョクは疲れた表情で出てきた。何か良くないことがあったのだと、シュレンは表情から汲み取った。

「昼食は馬車で摂ってください。移動に2時間、準備にだいたい40分は必要になるはずですから」

シュレンは馬車の扉を開けながらそういい、リョクに朝作った昼食とアラム茶（紅茶のような飲み物）が入った竹の水筒を手渡した。

「また行きと同じようにしてもいいのではありませんか？」

「その行為は危険であるということを教えたのは先生ではありませんでしたか？」

私は本を開きながら言った。今読んでいるのは「薬草学ー毒草全集ー」だ。あまり有名ではないが絵がわかりやすい し細かい説明がついている。値段も安いので金のない弟子にはもってこいだ。

「また危なそうな本を読んでいるのですか？」

「先生はおっしゃいましたよね？毒草でも治癒の力を持つものがある、と」

何故か先生は自分で言ったことをよく忘れる。どうなっているんだこの人の頭は。シュレンはそう思いつつページをめくった。

「授業は1時間ほどです。準備は私もお手伝いさせていただきます」

中央魔術師育成院では、師を持たない貴族の出の子が魔術を学んでいる。簡単に言えば（知られたら怒られるだろうが）「金持ちのボンボンが我がままに金を払ってもらいながら大して実践で使えない魔術を学ぶ学校」というところだろう。

「ここでの魔術は、一体何のためなのですか？」

シュレンは手を動かしながら訊ねた。ここでは対他国用の軍事的な魔術を習わない。身を守る魔術も最低限しか習わない。習うものといえば家庭で料理するときの火をつくるだとか、そんなちっぽけなものしかない。

「隠されているのですよ。魔術の危険性や、引き起こしてしまう悲劇と被害が」

魔術の危険性、悲劇と被害。実力より高望みすれば命が尽きることも、今まで魔術と魔術のぶつかり合いで起こった多くの被害を、知らないということだ。

「危険性は、教えなくていいのですか？」

「ええ。ここにいる子たちは皆実力よりも低すぎる魔術しか教わらない。それに貴族の出では大した魔力をはじめから持っていないんです。だから『知らぬ呪文を唱える』という魔術師にありがちなこともない」

「そう・・なんですか・・・」

授業が始まり、シュレンは外に出た。今授業を受けていない生徒が静かに外で本を読んでいる。

「あの」

そう声をかけられて振り向くと、シュレンより少し年下の少女がいた。貴族らしくきれいな金髪をおろしている。

「失礼ですけど、貴方は魔術師なんですか？」

「いえ。私はまだ弟子で・・」

「師匠は？どこにいるんですか？」

「今授業をしていて・・」

少女はそう聞くとキラキラと目を輝かせた。

「うわぁ～！貴方はリョク様の御弟子さんなんですか！？うわぁ～すっご～い！！私、魔術師になりたいんです！」

シュレンの心がズキンと痛んだ。この少女は知らないのだ。自分が魔術師になることができないという事実を。未来は既に親によって決められてしまっているということも。

「そう・・ですか。頑張ってください。きっと・・」

シュレンは息を吸った。事実を伝えるべきなのか。それとも、伝えないべきなのか。

「なれますから・・」

知らぬ間に小さな声でそう言ってしまっていた。

「はい！有難うございます！あ、もう授業始まっちゃうんで、行きますね！本当に、有難うございます！！」

シュレンは魔術師になることなく誰かの嫁となる少女の背中をただ見つめることしかできなかった。

6　避けられぬもの

授業が終ると、すぐに片付け、また馬車に乗り込んだ。

リョクの表情は授業前とさほど変わらないように感じた。いつもより険しい表情をしている。シュレンは議会で何があったのか聞きたかったが、聞く必要のある話なら時間が空いたときにいつも教えてくれるので聞かなかった。

馬車はあまり乗り心地がいいとは言えない。ガタガタと揺れるので脳出血を悪化させたり、妊婦には重荷になる。そんなこと、シュレンには関係なかったが、そんなことをぼんやり考えながら外の風景を見ていた。

「シュレン」

暗い声でリョクが呼びかけた。声色が良くない。

「何でしょうか」

シュレンはリョクの顔を見て言った。リョクは一呼吸してから言った。

「シュバン連合軍がすぐそこまで来ていることは知っていますか？」

「はい」

「魔術師達が戦いに行き、死者も出ています」

リョクは目を閉じた。ここから先を言うのが辛いようだ。

「その戦争に・・・私達も行かなければならないことになりました」

シュレンは思わず息を呑んだ。予想はしていた。でも、行く事になるかもしれないというのと、行かなければならないというのは重さがあまりにも違っていた。

「何人、行くのですか？」

「3人の弟子を連れて来いと、又、弟子が強ければ一人だけで構わないと言っていました。しかし・・・シュレン、貴方は将来素晴らしい魔術師になるでしょう。そんな貴方を連れて行き、貴方にもしものことがあれば・・と・・」

「そんなの、私は構いません。私がその、素晴らしい魔術師になる可能性は１００％でないじゃないですか。私が行きます。他の人に、辛い目に遭わせるのは・・・嫌です」

リョクはため息をついた。

「できれば貴方を連れて行きたくなかった。危険ですし、精神的にも辛いことですから」

「私は、女として生きたくはありません。それに、戦いから逃げ、生き延びた人にもなりたくありません。逃げて生き延びるくらいなら、向き合って死ぬ道を選びます」

そう言うと、リョクは悲しげに微笑んだ。

「ええ、貴方ならそう言うだろうと思っていました。では、・・・・
・・よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ」

この選択が、私にとって大きく道を変えてしまうことを知っていたのならば、私は、戦いから逃げ、生き延びた人間になっていたのかもしれません。

7　リョクの病

時間というものは残酷なものだ。何度も時間よ止まれと念じても、川の流れを止められない。すぐに上質なローブに着替えなければならない時間になった。

十分歩いていけるような距離だったのだが、舞踏会（という名の女が甘ったるい匂いの水をつけて男を批評する会）に汚れた服で行くのは良くないというのが暗黙の了解だった。なのでガタガタ揺れる馬車に乗る羽目になった。リョクは戦争の話をしてから暗い顔をして黙っている。戦争に行く羽目になったからというだけではなさそうなほど暗い表情をしていた。

ほんの数分足らずで会場に着く。女のつける甘ったるい水のにおいが充満していて、思わず息を止める。先生もこれを嫌っていたはずだが、そんなこと気にならないほど考え込んでいた。

「おう、リョク」

いつも明るいルーザンが、少し暗い声で言った。その脇にはウォルが引きつった笑みを浮かべて立っている。ルーザンがシュレンの方をチラッと見て言った。

「シュレンを・・・連れてきたのか・・・・」

不安からか声がかすれている。

「えぇ・・シュレンは・シュレンは、行くと・・・・・」

「一番弟子、を・・・！？お前、どういう事か伝えてるのか・・・・！！？戦いだけじゃないことを・・」

リョクがルーザンの言葉を遮って言った。

「やめてくれ！！俺は・・俺は・・・・！！・・・・・伝えていない・・。これから伝える・・・・・・。」

ルーザンが悲しげに微笑み、リョクの肩に手を置いた。

「すまないことをした・・口調が変わるほどお前の心を乱させることになっちまうなんてな・・・。でも、ちゃんと話しておけよ」

そういうとルーザンはウォルに行くぞ、と声をかけた。ウォルは心配そうにシュレンに目をやると、ルーザンについていった。

２人が行った後、リョクがぽつりぽつりと話し出した。

「すみませんでした。取り乱したりなんかして」

シュレンは黙ってリョクを見つめた。戦いだけじゃない。ルーザンの言葉が頭の中をグルグル回る。

「聡い貴方なら、気付いたのでしょうね」

「先生、貴方は狂いし強者（パロ・レゥ）なんですね？」

リョクが悲しげに頷いた。狂いし強者（パロ・レゥ）。普段はいたって普通の優れた魔術師。でも、戦い等で魔力が空気に強く混ざっているとき、その者の魔力が暴走する病。その治療法は皆無だ。

「私は戦い、そして先生の暴走した魔術を防がなければならない・・。そうですね？」

ええ、と言うとリョクは俯いた。だからリョクはシュレンを戦いに連れて行きたくなかった。まだ弱い弟子3人なら、他の魔術師がリョクを抑えてくれるから。でも、シュレンは実力があることを皆知っている。リョクが暴走すれば、それをシュレンが受け止めなければならない。

「それでも、貴方は行きますか？」

リョクが行くといわないでくれ、と言うかのように言った。

「先生、ごめんなさい」

シュレンはリョクの顔をしっかりと見つめて言った。

「それでも、私は行きます」

私の判断は、軽率だった。私の運命がこれで、永遠に変わってしまったのだから。

8　隠された舞踏会

話を終え、ウォルとルーザンに追いついた。するとすぐにウォルがシュレンに話しかけた。

「シュレン、お前、行くのか？」

「ええ。だからここにいる」

ウォルが不安そうな顔をして首を横に振る。

「ウォル、私は大丈夫だから・・」

前に顔をやると、いつも行かない所に向かっているのがわかった。大魔道師（お偉いさん）がいる場所に向かっていることをシュレンは勘付いた。考えてみれば、ふんわりとしたドレスを着た女や、不自然なほどピシッとした正装をする男が少なく、魔術師が多い。リョクとルーザンが辺りを見渡し、ウォルとシュレンを地味な扉の中へ押し込んだ。

「ちょッ！！」

ウォルの叫びかけた口をルーザンが押さえる。そして自らも素早く部屋へ入った。

「ああいうことをするときは教えてくださいよ。ビビるじゃないですか」

ウォルが膝を払いながら言った。

「それは悪かった。・・・シュレンは気付いたみたいだな」
「大魔道師との面会・・・ですか」
リョクが無言で頷く。
「よく来てくれたな。戦いに向かう魔術師たちよ」
大魔道師がいるであろう場所は防護の術で姿が見えなくなっていた。リョクが跪いたのに習って、シュレンも同じようにする。
「・・一番弟子か・・・お前が・・」
「はい」
「・・・そうか。ルーザン」
はっ、とルーザンが跪いたまま言った。
「お前はどう思った？」
「は？」
「一番弟子を連れたリョクを、どう思った」
「・・・私は他人であります故、リョクの判断の善し悪しを決めることなどできません」
ふん、腐るほど真面目だ、と大魔道師が言った。

「もういい。下がれ」

そう言うと同時に、開け放たれた窓から真っ黒な狼と黄金色の毛をした狐が飛び込んできた。２匹は空中で大きく伸び、着地する頃には娘と青年になっていた。

「人獣か。名を名乗れ」

「はっ、私は狼女、リオンにあります」

「私はその弟の狐男、リアンにあります」

シュレンは人獣、と小さく呟いた。人と獣の間を行き来する種族。風変わりな服装をしているが、戦闘力は目を見張るものがある。

「つまらん、下がれ」

シュレンはその言い草に苛立ちを感じた。そして大きく息を吸うと、人差し指を影に向かって突き出して言った。

「どういうつもりですか、それは？私たちは命がけで戦い、忠誠することをここに示しているのです。確かに貴方が戦えといえば多くの敵国が滅ぼされることでしょう。しかし、貴方は戦わない。それだというのに命令により私達の仲間が死にます。死に対する態度がそれなのですか？この中の誰かが死ぬかもしれないのに、貴方は軽蔑しかないのですか？」

ウォルとルーザンは焦ったようにシュレンと大魔道師を見比べた。しかし、リオンとリアン、リョクは顔にうっすら笑みを浮かべていた。

「無礼者ッ！」

部下の誰かがさっと剣を抜くのがわかった。それでもシュレンは、人差し指を影に向けたまま言った。

「この国の中で、貴方は確かに重要人物かもしれない。けれど・・・私はそんなハリボテに忠誠を誓うつもりはありません。命令されれば私はこの国の刃となりましょう。しかし・・貴方のために命を捨てろという命には・・・従いません」

影がわずかに動き、言った。

「もう一度言おう。・・下がれ」

シュレンは言葉を発しようとして口を開けた。しかし言葉を発する前に遮られた。

「・・今この場で、貴様の首を飛ばしてもよいのだぞ」

ウォルがかすかに息を呑む音が聞えた。そっとリョクがシュレンの前に立ち、静かに言った。

「それでは、失礼します」

目を閉じて静かに頭を下げ、４人に目配せをして部屋を出た。残りもそれに続いて部屋を出た。

9　獣と人間

部屋を出た瞬間、狼女のリオンがプハッと吹き出した。リアンもクスクスと楽しそうに笑っている。

「いやぁ～初めて見たよ。うん。見た？あのジジイの。あれ、内心ちょっと動揺してたよね。アハハッ！素晴らしいね。うん。素晴らしいよホント。いいねぇリョク。いい弟子を持ったよ。ホント。アハハハハッ！！」

リオンは壁にもたれかかり、苦しいと言う様に壁をドンドンとたたいた。

「ええ。でも驚きましたよ。いくら正義感が強いとはいえ、国のトップに逆らうほどの度胸があるとは思いませんでしたよ」

「でも、人獣を庇う人間がいるなんて、この国中が思ってなかったよ。わかりやすくするとあれだよね。１０年くらい前の。ジジイに噛み付いた犬の処刑に乱入して犬を助けた騎士（ナイト）の事件。獣を庇う人間なんてあれっきりいないよ」

「おいおい、リョクはお前らを庇ってるだろ？恩を忘れたか？狐小僧」

ルーザンが面白そうに笑いながら言った。

「忘れてないよ。けど、あの爺さんの前で堂々とあんなことしないだろ？リョクは名も実力も有名だけどさ、弟子の娘（こ）。あの娘名も実力も無名でしょ？そんな人間いないって、ホント」

シュレンは先ほどの行動を思い出すと顔を真っ赤に染めた。衝動的だったが、軽率すぎた。どうしてあんなに恥ずかしい事をしたんだろう！？シュレンはリョクの近くまで行くと、頭を下げて言った。

「先ほどは恥ずべき行動をしてしまい、申し訳ありませんでした」

真っ先にリオンが反応した。

「勇気だけじゃなく礼儀もある。しかも美人じゃん？よかったねーリョク？こんなにも優秀な弟子なら誰でも欲しがるよ」

「謝る事じゃないよ。君は立派な事をしたんだからもっと堂々としなよ？僕らは面白がってるけどさ、正直嬉しかったよ。人間と人獣の命を対等に考えてくれる魔術師がいるのがわかったし」

リアンはそういって優しく笑ってくれた。

「有難うございます、リアンさん」

「名前もう覚えてくれたんだ。嬉しいよ」

リアンは嬉しそうに笑った。シュレンはふと自己紹介をしていないことに気付き、また顔を赤くした。どうしてこんなに恥ずかしい事ばっかり！？

「あ、すみません、自己紹介、まだでしたよね？」

「ん？ああ、いいよいいよ。知ってるから。シュレンさんだよね？

上流の魔術師はあんまり知らないみたいだけど、僕らみたいな階級は噂が好きでさ。リョクは僕らと親しくしてくれるから特に噂が多いんだよ。『リョクが美人で優秀な弟子をとった』って噂はよく聞くんだよ。皆こんな勇気があると思ってないけど」

「こら～。リアン何？口説こうとしてんの？無理だって～。アンタは１００％無理だから。アタシが保障するよ。うん」

リオンは弟の様子を見ていたようで馬鹿じゃないの？ほら、と言って弟を前へ引っ張った。そこにすかさずウォルが隣に来た。

「シュレン、」

何も言わなくてもわかった。

「言わないでいいから。大丈夫」

シュレンは一呼吸して言った。

「心配してくれてたんでしょ？でも、・・大丈夫だから。いつか、絶対向き合わなきゃいけない瞬間(とき)が来る。私は、進みたいの。現在(いま)を、変えたいって言うか・・・。わかんない、けどさ。進みたいの。前でも、後でも、横でも。・・・きっと、進んでるってことが大事だから」

「でも、馬鹿なことすんのはやめろよ」

「え？」

意味が一瞬わからずに困惑する。ウォルの顔を見ると、真剣さが漂っていた。

「あいつの部下の剣、お前の首に触れてたんだよ。いつでも斬りおとせる様に。だから、あんな死にそうになるようなことはやめろってことだよ」

シュレンはふっと笑った。

「有難う。でも、アンタもアンタで、お嫁さんさっさと探しなよ」

人と獣。誰が何と言おうと、私は考えを変えない。
命の重みは、どんなものでも同じってことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3725u/

紅蓮の魔術師

2012年1月6日14時48分発行